

西ネグロス州バコロド市バナゴ村でのエクスポージャーを通して

心理学部 2年 T. K.

はじめに

私は現在小学校教員を目指して、明治学院大学の心理学部教育発達学科で教育について学んでいる。私はこれまで二十カ国以上の国を訪問したが、発展途上国へ行くのは初めてである。フィリピン・エクスポージャー・プログラムでは、自分の大学での学びを生かし教育に焦点をあてて、同国のストリートチルドレン、孤児などを始めとする貧困層の子供を取り巻く暴力について考えた。自身の海外経験、日本での生活と対比させながらフィリピンの現状を目にすると、数え切れないほどの問題が浮き彫りになってきた。

エクスポージャーの事前学習では、同国の英語教育や就職事情について学びを深めていた。しかし、実際に現地でインタビューをすると、教育以前に貧困問題が深刻で、毎日を生き抜くことに精一杯な人々にたくさん出会った。彼らは朝から晩まで過酷な労働をしても低賃金で、1日に必要な食糧さえ手に入れることができない。貧困層の子どもやストリートチルドレンは私たち日本人に気づき、物乞いをしてくる。彼らは学校に通えず、毎日、物乞いで得たわずかな現金で食べ物を買って生き延びている。私は日本で、子どもに物乞いされたことが一度もなかったため、この出来事にかなりの衝撃を受けた。また日本では、おおかたの子どもは少なくとも中学校まで義務教育を受け、貧困問題が公になることもあまりない。そのため、私はそれを気にすることもなかったし、自分とは無関係だとも思っていた。

しかしこのプログラムの中で、自分とフィリピンの貧困層の人たちがどのように関係していて、自分に何ができるのか考えるうちに、日本にも同じような状況があることに気づいた。近年、日本でも、給食費や修学旅行費などを支払えない保護者が増えており、夏休み明けに痩せてしまう子どもや、修学旅行に行かれない子どもが多くなってきている。メディアなどで貧困の話を目にしてもあまり実感が湧かなかったが、フィリピンの貧困地域で人びとと生活をともにすることによって、貧困を現実の問題として意識するようになった。

本報告書において、私が滞在したバナゴ村の子どもたちを取り巻く暴力とその暴力に人びとがどのように抗っているのか、私にはどのような関与があり得るのかについて考えたことを報告する。

1. バナゴ村

私たちの一つ目のホームステイ先はバナゴ村という漁村だった。バナゴ村とは首都マニラから飛行機で約 1 時間の西ネグロス州バコロド市から、車で 30 分ほど離れた所にある。3 日間を通して私たちは、住民やストリートチルドレン、孤児院や公立小学校関係者や生徒などへインタビューを行った。2 組のバナゴ村の家族、6 人のストリートチルドレン、2 人の孤児、10 人の公立小学校生徒にインタビューをした。ここで、バナゴ村では珍しくない児童労働の事例と公立学校の生徒が置かれた現状について紹介する。

貝剥きをする家族

バナゴ村の 8 割の世帯は、村の漁師が獲ってきた貝を剥く仕事に従事している。私たちは、貝剥きをする 2 つの家族にインタビューをした。もっとも印象的だったのは、A さん一家だ。

A さん（66 歳、男性）の家族構成は、配偶者（63 歳）と 2 歳（男子）、5 歳（男子）、17 歳（女子）になる孫の 5 人である。孫たちの両親は子供を置いてこの村を出て行ったので、今は一緒に暮らしていない。生活のために、A さん夫婦と妊娠したあと通学できなくなった 17 歳の孫娘、2 歳と 5 歳の男の子は家族全員で貝剥きをして生計を立てている。やっと片言の言葉を発するようになり、遊ぶことが楽しくて仕方ないはずの 2 歳の男の子までもが、刃渡り 20 センチメートルを超えるナイフを持って貝剥きをさせられていた。それにも関わらず、一家が十分に食べることは非常に困難で、1 日に摂取できる食べ物は、米、近所の人やボランティア団体などから供給されたコーヒーやパンなどである。

1 日の収入は、60 ペソ～80 ペソ（日本円で約 130～170 円、2016 年 10 月 17 日の為替レート）である。1 リットルくらいの缶を剥いた貝でいっぱいになると 4 ペソ（約 9 円、同上為替レート）になる。その収入のほとんどは、毎日の食費に当てられる。米 1 キログラムは、種類にもよるが、40～50 ペソである。フィリピンの人びとは日本人と同じように米を主食としており、貧困層の人々は副食を買う経済的余裕がないために一食に摂取する米の量が多い。

公立小学校の生徒の現実

公立小学校では、所得中間層の女子生徒 5 人と、貧困層の男子生徒 5 人にインタビューをした。インタビューでは、名前、年齢、家族構成、両親の仕事・収入、政府・NGO などのサポートの有無、人生で一番辛いこと、人生で一番幸せなことなどについて質問した。

所得中間層のある女子生徒は、両親が自営業をされていて一日 20,000 ペソの収入があり、家族旅行が人生で一番幸せなことだと答えた。人生で一番辛いことについての質問には特

にないと、女子生徒全員が口を揃えて言った。

他方、5人の男子生徒の答えは対照的であった。両親の収入は毎日生き抜くのがギリギリで、自分も働いている生徒や、学校で提供される昼食が唯一の食事である生徒もいた。人生で一番辛いことについては、経済的問題から母親が病気になっても病院へ行く現金がなかった、両親が離婚したあと経済的な理由から祖父母に預けられたなどと答えた。インタビュー中に過去の辛い経験を思い出して泣き出す生徒もいた。

校内を見学していると、ある掲示板が目に入った。それは、学校の成績優秀者を張り出しているポスターで、インタビューした女子生徒のうち何人かの顔写真が貼り出されていた。貧困層の子どもたちは、食べるため、また、学校へ行くために働かざるを得ないので、経済的に余裕のある家庭の生徒と比較すると、学力に差がでているようだった。さらに、教員によると、低所得者層の生徒たちの両親は教育を受けていないことが多く、その必要性を理解していないという。

2. バナゴ村の子どもたちを取り巻く暴力

すぐそばに海があるにもかかわらず、同村の多くの子どもたちは、十分な栄養を摂ることができない。漁村で暮らしている人々の食事のほとんどは海で取れる海鮮であるが、毎日十分な食料が確保できるとは限らないからである。Aさんの2歳の孫の茶色い髪や膨れたお腹から栄養不良が想像され、また、小学校でインタビューした男子生徒は学校で提供される給食が1日の唯一の食事だと言っていた。

3. どのように暴力を克服しようとしているのか、その努力を何が阻害しているのか

「自分は貧しい家に生まれたから一生貧しいままだ」、「学校に行くためのお金がないなら子どもでも働かなくてはならない」などの発言がきかれ、経済的な理由によって十分に食べられない、学校へ行かれないという状況は構造的暴力の結果であるにもかかわらず、村人は暴力を内面化し、構造的暴力の中にいることに気づいていない。

4. 立場の異なる人びととどのように連帯しているのか

学校で昼食を提供することは一つの連帯としてあげられる。しかし、これについては市の政策などではなく、児童の状況を見かねた教師が自らの意思で児童に昼食を提供している。

Pantawid Pamilyang Pilipino Program : 4Ps (最貧困層への条件付き現金給付プログラム) という、就学中の子どもをもつ貧困家庭 (審査に通った家庭) に限り毎月 300 ペソ～

500ペソの就学手当が給付されるプログラムもあるが、条件が厳しく、誰でも給付が受けられるわけではない。

5. 私とはどのように関係しているのか、そして、どのような関与があり得るのか

日本にいるときは、フィリピンの教育、あるいは、貧困層の人びとの生活について考えたことは一度もなかった。しかし、バナゴ村の子どもたちの現状を目の当たりにし、日本の生活を振り返ると、同種の暴力の存在があることに気づいた。親の所得によって学校を選択肢や留学などの機会に格差が生じ、子どもがもっている可能性にも格差が生まれている。

まとめ

聞き取りなどから得た情報をエクスポージャーの5段階アプローチにそって考えてみる。

まず、ステップ1の暴力として、貧しい子どもの人権が守られていないこと、親の収入によって学業成績に格差が生じていることが挙げられる。つぎに、貧困層の子どもが学校に行くために働き続けるという現実、暴力とも捉えられるが、ステップ2の暴力被害者の自力更生努力であるとも考えられる。ステップ3の更生努力を阻害するものとして、学費は無料であるが、学校の制服代や交通費を支払う必要があることが挙げられる。ステップ4の被害者と外部者の連帯については、教員が貧困層の生徒に昼食を提供していることが挙げられる。

最後に、このフィリピン・エクスポージャー・プログラムでもっとも重要なステップ5の関係関与である。私は第一に、日本人の無知を無くすことだと考えた。自分自身も同様に、フィリピンに行ったことのない人は、学校でもフィリピンについて学ぶことはほとんどないため、無知に近い。発展途上国には貧困が原因で死んでいく子どもたちがいるといった広告を目にしたつもりだが、日本にいる限り自分たちの生活と接点がないために無関心になってしまう。これを踏まえて、フィリピンの現状を変えていくためには、自分たちのフィリピンでの経験をより多くの人に伝えて、自分たちとの接点を考える機会を作ることが大切だと考えた。自分は現在小学校教員を目指しているが、将来自分が教員となった時に、子どもたちにも自分の経験を伝え、自分達に何ができるのかを一緒に考えてもらう授業をしたいと思っている。

さらに、第三者である私たちが発見した暴力を、現地での報告会を通して現地の人々に伝えることによって、暴力の被害者が暴力を認識するきっかけになるかもしれない。したがって、エクスポージャー・プログラムに参加し現地の人々と関わり続けることが、私がフィリピンの現状を変えていくためにできることだと考えた。